

あとがき

瀧口修造：生きている証し<sup>あか</sup>

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今回で10回を数える。10回というひとつの節目であるが、今年にはミロ(1893-1983)をとりあげ「ジョアン・ミロと瀧口修造」展を開催する運びとなった。展示作品の内容は詩画集2冊、彫刻ブロンズ5点および版画8点である。

詩画集は瀧口修造の詩とミロの版画で構成されている。そのひとつは「手づくり諺-ジョアン・ミロに」(1970年ポリグラフアー社刊、バルセロナ)で、瀧口修造の詩が日本語のほか英、仏、独、伊、西、カタロニアの6カ国語に訳され、ミロがそれぞれに異なる版画を添えている。他のひとつは「ミロの星とともに」(1978年平凡社刊、東京)で、瀧口修造のミロへのオマージュの詩が4編収録されている。ともにリトグラフであるが、前者はモノクロームで、後者は多色である。

彫刻はブロンズ5点で、1969年から71年に至る間に制作された作品である。エディションの数が、H・ムーアなどに比し概して少ないことを記しておきたい。

版画は、ミロの数多い作品のなかから、8点(うち戦前4点、戦後4点、1933-68)を選んだ。数は少ないが、ミロの代表的な版画が数点含まれている。

今回の展覧会はカタログのテキストは次の三氏にお願いしご寄稿いただいた。

岡田隆彦：ものの源泉へ——ミロと瀧口修造

鶴岡善久：〈諺の誕生〉、ならびにそのあとさき

土淵信彦：瀧口修造著『ミロ』の成立過程 試論

——国際シュルレアリスム運動の流れの中で

いずれも心のこもった瀧口修造へのオマージュにふさわしい論稿である。各氏の異なる視点から発射されるライトに照らされ、ミロを通して瀧口修造の姿が浮かび上がってくる結果となった。ご三かたに深謝申し上げる。

なお、瀧口修造「ジョアン・ミロ」(みずゑ、1937年6月号所載)を関係者のご了解を得て再録した。このエッセーは、世界で最初に出版されたミロ論の単行本として有名な「ミロ」(1940年アトリエ社刊)に先だつこと3年前に書かれたもので、その原型をなすものである。今を去る丁度53年前の、あの時代に、かかるミロ論が存在していたことに驚くのは私のみではあるまい。畏敬の念を禁じ得ず再録する所以である。なお、この論文と1940年に出版された「ミロ」との間の大きな差異は、1912-15年の間にミロが学んだアカデミーに対する評価で、前者では否定し、後者では肯定していることを付記しておく。

夏が近づくと、7月1日に亡くなった瀧口先生のことがいろいろな追憶をともない思い出されてくる。先生が亡くなって11年の歳月が流れた。一体歳月とは何であろう。人間は記憶を忘れていく。忘れることで生きている。人間の脳のしかけはうまく出来ているな、と思う。では、記憶がますますヴィヴイドに存在と化していく、というのはどういうことか。まるで無声のトーキーのように瀧口先生のしぐさやそぶりが時折、私の脳裡をよぎっていくのだ。思うにこれは先生と私との交信の証<sup>あか</sup>であり、まさしく私が生きている証<sup>あか</sup>である。まだやるべきことは多いですね、と私はつぶやく。

先日、小尾俊人さんが来廊され、瀧口修造全集出版のことに話が及んだ。この年の暮までに、みずゑ書房から第一回配本の予定であり、全集は28巻に及ぶとのことであった。予想以上に多い冊数に私は驚いた。没後11年目にしようやく出版されることになった瀧口修造全集の意味は大きい。それを待ち望んでいた私には快挙という言葉が口をついて出るのである。

また、海外で瀧口修造の全貌を示す展覧会の計画

が進められている、ときく。戦後日本の芸術各分野における歴史をみる時、瀧口修造の残したしごとの意味は消しがたい存在となっている。仮りにもし先生のしごとが無いとすれば、いかにその歴史は貧弱なものとなることか。瀧口修造の存在と意味が世界的に世に問われようとしていることはうれしいことである。実現が切に期待される。

最後に、この展覧会開催に当たって、ご協力いただいた皆様にお礼申し上げるとともに、瀧口綾子夫人のご健勝を心からお祈り申し上げます。

1990年6月12日

佐谷画廊

佐谷和彦

追記——巻末に第1回から今回までの、オマージュ瀧口修造の内容、テキスト執筆者のリストを収録したので申し添える。

#### オマージュ瀧口修造展リスト

第1回 1981年7月8日-25日

「物質のまなざし」展

詩——瀧口修造

石版——アントニ・タビエス

田中清光——瀧口修造と「物質のまなざし」

佐谷和彦——詩人の贈り物

第2回 1982年7月7日-24日

「妖精の距離」展

詩——瀧口修造

石版——阿部芳文(展出)

巖谷國士——三年ののち

土淵信彦——切抜帖から

第3回 1983年7月4日-23日

加納光於：瀧口修造に沿って

巖谷國士——「運動」——旅人たち

大岡 信——時のふくらみ、闇のなぞなぞ

《稲妻捕り》(Elements)のために(再録)

第4回 1984年7月6日-28日

山口勝弘：ビデオスベクタクル〈未来庭園〉

山口勝弘——瀧口修造へのオマージュ展について

佐谷和彦——未来庭園の散策者のために